

WCO IOF – ESCEO 2024 in London に参加して得た経験

運動機能科学領域 松本 凱貴

私は骨粗鬆症や筋・関節疾患などを主とした国際学会である WCO IOF – ESCEO 2024 in London に、4/11 ~ 4/14 にかけてポスター発表および学会参加を致しました。今回の学会では 9755 人もの参加者がおり、演題数は 1515 演題が用意されておりました。また、様々な国籍の人々が集結しており、国際色豊かな学会でありました。日本人の参加は、私が知る限り、私を含めた 7 人であり、さらに理学療法士では、私と共同演者である本学指導教員の今岡真和先生の 2 人のみであったと思われます。

私は今回、「The relationship between pre-frailty, and appetite depression in community-dwelling elders in Japan」(地域在住高齢者におけるプレフレイル有症と食欲、抑うつとの関連性)についてのポスター発表を行いました。内容としましては、本研究は地域在住高齢者を対象に、プレフレイル有症と食欲について関連性を調査することでした。研究参加者は、「つげさんアタマとカラダをしるヘルスチェック」に参加した地域在住高齢者 204 名(男性: 53 名、女性: 151 名、年齢: 74.1 ± 6.6 歳)でした。測定項目はフレイル判定、食欲、食習慣、高齢者の抑うつ、全般的認知機能、注意機能、体組成の評価としました。統計学的検討ではロバスト群とプレフレイル群の 2 群に分け、評価項目の単変量解析を行い、有意差を認めた項目に二項ロジスティック回帰分析を行い、独立関連因子の検討を行いました。なお、有意水準は 5% としました。結果は、プレフレイル群が有意に低下していた項目は食欲低下、抑うつ、注意機能でありました。そのうち、プレフレイルの独立関連因子として認めた項目は食欲低下、抑うつでありました。以上に対して、カナダの大学院生やベルギーの医師、ドイツのランゲンフェルトに拠点を置く、mdm(Medien Dienste Medizin) 出版社の Christian 氏との意見交換も身振り手振りではありましたがなんとか行えました。内容についてベルギーの医師からはお

褒めの言葉を頂き、Christian 氏からは「是非とも Paper にしてください」とのお言葉も頂きました。今後は、この内容を縦断研究にまで昇華していきたいと考えております。

今回の学会発表では、初の国際学会であったため言語の壁を出国前から感じており、ポスター内容はおろか上手くコミュニケーションもとれないのではないかとという心配があり、いつもとは違う緊張感に包まれていました。ですが、専門職同士ということもあり、お粗末な英語ではありましたが、理解をして頂き、なんとか発表およびディスカッションを終えることができました。また、今岡先生からは「臆さずに積極的にコミュニケーションをとっていきましょう」と事前の打ち合わせで話しており、前日の今岡先生のディスカッションも見ていたことも相まって、自分の方から声をかけていくことができるようになっていました。

ポスター発表を通じて、間違っても構わないので積極的にコミュニケーションをとることの必要性や、わからない場合はゆっくり話してもらうことや、書いてもらうなどの方法を使うことの必要性も学びました。また、生活圏の違いや文化の違いなども学ぶことができ、大変貴重な経験となりました。

最後になりましたが、お忙しい中抄録の確認などご協力を頂いた先生方、学会発表をするにあたり援助して頂きました大阪河崎リハビリテーション大学様には感謝申し上げます。

